

活 用 事 例	上越教育大学附属小学校	水谷徹平教諭
活用事例タイトル	体験と言語活動から考える実践的な情報活用力の育成 ～子ども記者、フリペで発信「じょうえつ.net」の活動を通して～	
対象授業科目/活動	総合的な学習の時間	
授業または活動の概要(目的、実施時期、授業の場合教科名や単元名、対象学年、参加人数、ICTの使用局面など)	<p>1. 目的 ファインダーを通してみることで、より主体的に人、もの、こととかかわり、感性や思考力をはたらかせるとともに、写真やフリーペーパーを通して、人や世の中と双方向でかかわり、地域の良さを実感する。</p> <p>2. 実施時期 平成24年度(通年)</p> <p>3. 対 象 3年生児童(38名)</p> <p>4. ICT使用の局面 1班4人で取材チームを編成し、1班1台のデジタル一眼レフカメラを手に市内の朝市や各地へ出かける。心が動いたものを取材手帳に挟んであるA5判の取材カードに記述し、撮影した写真を教室のプリンタで取材カードに印刷する。班で行動することで、機器の使用方法や活動に向き合えない子へ声を掛けたり、自分の興味とは違うものにも出合ったりしている。インタビュー場面では、メモと併用して一眼レフカメラの動画機能を使ったり、ボイスレコーダーを用いたりしている。取材を基に、1カ月に1枚フリーペーパーを書く。記事の多くは、お店の人から聞いた情報やお客さんからの感想、自分で感じたり気づいたりしたことである。対象の正確な名前や旬がいつなのかなど、本やウェブで事後調査も行っている。</p> <p>お出かけ取材では、観光パンフレットや旅行雑誌、行ったことのある子の体験談に加え、ウェブを活用して事前調査を行っている。イベント情報や利用料金だけでなく、アナログ、デジタル双方の地図や時刻表で行先までのアクセス方法を調べ、電車やバスといった交通手段や出発時刻などの予定を決めて取材に赴く。</p>	
ICT活用により期待できる効果 ICT活用のねらい	デジタルとアナログ双方で情報活用・情報発信の必然がある活動を仕組み、体験を通して自然に情報活用の実践力が高まった。	
評価、振り返り(活動の評判や児童・生徒の声など)	<ul style="list-style-type: none"> ・朝市のおじさんに渡すフリーペーパーをかくときに、読んだ人がどんな気持ちになるかを考えるようになった。 ・トップ記事の本文を読みたくなるように、記事の内容全部を言わずに、想像させるような見出しや興味を引くような写真をのせるようになった。 ・地域紙「新潟 komachi」の記事をつくるときに、取材した朝市のパン屋さんの評判が落ちたり、読んだ人が嘘だと思ったりすることがないように、記事の内容を確かめようとするようになった。 	
その他 (関連WEBサイト等)	http://jue-el.jugem.jp/?cid=14	

体験と言語活動から考える実践的な情報活用力の育成

～子ども記者、フリペで発信「じょうえつ.net」の活動を通して～

上越教育大学附属小学校 水谷 徹平

■はじめに

本校がある新潟県上越市は、海、山があり、雪が多く降る四季の変化や自然に富んだ地である。子どもたちは、「じょうえつ.net」という情報発信局を開設し、子ども記者・子どもカメラマンになりきって、デジタル一眼レフカメラと取材手帳を手に、朝市や市内各地に繰り返し訪れ、心の動いたもの取材して、フリーペーパーにまとめるという活動を行った。

体験とかかわった言語活動の充実によって、情報活用の実践力と情報モラルを育んだ実践を紹介する。

■体験的に情報活用の実践力と情報モラルを育む

現代社会は核家族化や少子・高齢化、利己的な考えの増加などからコミュニティが消失し、かかわりが希薄になっている。顔の見える関係を大切にしながら、膨大な情報が行き交う社会を生きる上で、情報メディアをよりよく使う力も必要となる。急速に変化する情報化の光と影に、教え込まれた知識や技能では対応できない。体験や実感を通して考え、共有し合うことで、実践力として機能していくのである。



本活動では、繰り返し朝市や地域の人、もの、こととかかわり、よさを集めたり再構成したりする中で、人のあたたかさや郷土のよさ、季節の変化に気付いていく。また、撮りためた写真や感想カード、インタビューなど集めた情報をまとめ、フリーペーパーや、より公共性の高い地域誌での情報発信を行う。相手と目的を意識して調べ、まとめて、伝えることで、思いや考えが相手に伝わる文章を書いたり、写真の選択、レイアウト、見出しの読み手への効果を考えたりし、活用、探求を通した主体的な言語活動が行われる。情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信する活動から、情報活用の実践力を高めるとともに、著作権や肖像権を意識し、情報発信の責任や社会への影響を、体験をベースに自分の考えをつくり、実践力として機能させる経験を重ねる。

■魅力的な地域素材を活動の対象に

地域には、二・七の市（大町3丁目）、四・九の市（大町4・5丁目）という朝市が定期的開催され、にぎわっている。

朝市には、その時期の地産の食材が並ぶ。毎週、訪ねることで、店頭や人々の会話などの移り変わりから、季節に関係するものを見つけられる。繰り返し訪れ、お店の人やお客さんと顔馴染みになり、季節の変化を感じるとともに、地域や人とのつながりからあたたかさを感じることができる。



また、地域にはブナ林や海水浴場、スキー場といった観光地も多くある。月1回のペースで子どもが計画を立て、電車やバスで市内の各地に赴く「お出かけ取材」を行い、地域のよさを体感していく。

季節に即した人々の営みと地域のよさを、体を通して感じる活動ができる活動を繰り返す。

■実践の視点

- ・ファインダーを通して見ることで主体的に人、もの、こととかかわり、感性や思考力をみがく
- ・取材を通して、人や地域社会と双方向でかかわり、地域のよさを実感する

ICT 活用事例

■ ICT 活用とその工夫

1 班 4 人で取材チームを編成し、1 班 1 台のデジタル一眼レフカメラを手に市内の朝市や各地へ出かける。心が動いたものを撮影したり絵にかいたりし、取材手帳に挟んである A 5 判の取材カードに、インタビューしたことや感じたり考えたりしたことを記述する。班で行動することで、機器の使用方法や活動に向き合えない子へ声を掛けたり、自分の興味とは違うものにも出合ったりしている。教室に戻ると、取材カードをまとめたり、プリンタにメモリーカードを差し込んで写真用紙に印刷し、取材カードやフリーペーパーに張り付けたりする。また、コンピュータで主題が引き立つようにトリミングをしたり、メモリーカード内の自分のフォルダに写真を整理したりしている。インタビュー場面では、メモと併用して一眼レフカメラの動画機能を使ったり、ボイスレコーダーを用いたりしてフリーペーパーの記事に生かしている。記事の多くは、お店の人から聞いた情報やお客さんからの感想、自分で感じたり気づいたりしたことであるが、対象の正確な名前や旬がいつなのかなど、本やウェブで事後調査も行う。



お出かけ取材では体験談に加え、観光パンフレットや旅行雑誌、ウェブを活用などで事前調査する。イベント情報や利用料金だけでなく、地図や時刻表で行先までのアクセス方法を調べ、電車やバスといった交通手段や出発時刻などの予定を決めて取材に赴き、子どもが為すことによって学んでいく。

子ども記者になりきるための道具や発信方法の本物感と、デジタルとアナログ双方で情報活用の必然がある活動を仕組み、体験を通して情報活用の実践力が自然に高まるデザインを心掛けた。

■ さあ、取材へ出かけよう

・子どもカメラマン誕生

春、3 年生 3 8 人の子どもたちとの学級開き。昨年担任していたきょうだいをもつ子や、始業式、入学式で写真撮影をする担任の姿を見た子から「先生ってカメラマンだよ」「コンピュータが上手なんだよ」「僕たちも使わせてもらえるのかな」などといった声が聞かれた。「みんなもカメラマンをやってみる？」と投げかけると大喜び。渡したカメラを手に、早速外へと飛び出したその日から、子どもカメラマン、子ども記者としての活動が始まった。取材手帳と一眼レフカメラを手に、春探しや、学校の周りを探検して地図にする活動を始めた。



・ファインダーをのぞいてみると

学校脇の原っぱは、まだところどころ雪が残る枯れ野原。しかし、1、2 年生で毎日遊んできた馴染みの場所である。「あ、こんなところに春を見つけた！」と、フキノトウやツクシ、まだ固い桜のつぼみを探し出していく。50 mm マクロレンズを付け、腹ばいになってシャッターを切っていた直樹さん。「上手に撮れたよ」と見せてくれたフキノトウの写真をプレビューしてビックリ。「フキノトウって、この一つ一つが花なんだ！」興奮して友だちにも教え、観察が始まる。取材手帳に挟んだカードにスケッチする子、理科室に虫めがねを取りに行く子、プレビューを拡大して確認する子と大騒ぎ。早速、特ダネスクープを一つ見つけることができた。



シャッターボタンだけ教えた一眼レフカメラは、子ども同士で教え合いながら使い方を習得し、構図や主題を意識して撮影をしていくようになった。

ICT 活用事例

・高田公園にお出かけ取材に出かけよう

学級開き3日目。原っぱや校地内の春はあらかた探しつくした子どもたちから、「高田公園に行こう」と声が挙がった。1・2年生の時にもよく遊びに行っている、歩いて5分ほどの公園で、松平忠輝公の居城として築かれた高田城の城跡公園、約4000本の桜が咲き誇り、日本3大夜桜の一つと言われる名所である。

桜の多くはまだつぼみだったが、フキノトウやキクザキイチゲ、ミズバショウにツクシなど、春をたくさん見つけてはパシャリ。まだ、お客さんや空いている屋台も少なかったが、みんなで一つずつぼぼ焼きを食べ、「また来ようね」と決めた。



・朝市を訪れて季節を感じる

4月12日、取材を重ね、取材カードもたまってきた子ども記者。昨日も、桜咲く高田公園取材の後に、駅前の本町まで足を伸ばした。

今日は、学校から歩いて15分くらいの通りに、二・七の付く日に開かれる朝市に行くことにした。

店先で色とりどりに咲く乱れるお花屋さん、山菜やタケノコなど山の幸を売っているお店、キムチ屋さんに果物屋さん。面白そうなものを次々見付け、じっくり観察してカードに描いたり、写真を撮ったりしていく。見たことのない山菜を見つけた誠人さん、早速、お店の人にインタビューである。



誠人さん：「これは何ですか？」

お店の人：「これはね、イタドリという山菜だよ。」

誠人さん：「おじさんが採ってきたんですか？」

お店の人：「そうだよ。これくらい大きさと、柔らかいからおいしいよ。」

誠人さん：「もっと大きくなるんですか？」

お店の人：「そうだね。2mくらいになるけれど、大きくなると固くなっちゃうんだよ。」

担任：「先生は172cmだから、先生よりももっと大きいよ。」

誠人さん：「すごく、大きくなるんだね。」

お店の人：「春の芽とも言うね。茹でて食べるときっと春の味がするよ。」

一人300円ずつお家の人からもらって出かけた朝市取材。誠人さんは、春の芽イタドリを買った。他にもフキノトウやコゴミ、タケノコなどの春の味を買う子ども、おいしそうなお店に誘われ、4本500円の焼き鳥を1本100円のバラ売りで食べさせてもらった子ども、枝で売っている桜の花を買って教室に飾った子どもなど、思い思いにお店の人とのコミュニケーションをしながら買い物を楽しむ。教室に戻っても買ったものを自慢したり、花を飾ったり。イタドリやコゴメは天ぷらにして味わった。



ICT 活用事例

・ たまった取材カードを見直して…

「また行きたい」という子どもたちの声に押され、4月、5月と15回ほど朝市に出かけた。買い物を重ねる中で、たくさんものに出会うとともに、学級でもコゴメ、ワラビ、新ジャガ、イタドリ、トマト、トウモロコシ、タケノコ、梅から作った梅ジュースなど数多くを味わった。ファインダーをのぞいて写真を撮ったり、お店の人に説明を聞いたりしながら、お店に並ぶ珍しいものをみつけ、取材カードに見付けたり驚いたりしたものやことへの気付き、お店の人との会話などを記し、蓄積していった。

子どもたちは教室に戻ると、カメラのメモリーカードを教室のプリンタに差して印刷し、取材カードに貼っていく。写真を貼ったり、絵を描いたりして取材手帳には多くの取材カードが蓄積された。

「学校の周りがあるものは、地図にしたら分かりやすいよ」一雄さんの話から、大きな学校周辺の白地図を描き、取材したルートや見つけたものをかき込んで、取材したものの位置が、すぐに分かるようにまとめ方に目が向いて行く。

・ 取材で見つけた特ダネスクープを伝えたい

取材を重ね、たまっていく取材カード。体験の中で表れる表情や動いた心は、消えていくものである。しかし、取材カードを見返すことで、その時の記憶が思い出されるとともに、カードを整理していく中で「いろんな花の取材カードがこんなに集まったよ」「山菜って、4月と5月で売っているものが変わっていくんだね」など、売っているものの変化や自分の興味の所在を自覚していった。たまった取材カードをから様々なことを思い出し、友だちに見せながら、自分の発見やエピソードを話す姿が増えてきた。

学級の友だちには、朝市取材が終わった後にどんなものを見つけたかを伝えている。さらに「いつも優しく接してくれる朝市の方やお家の人に、自分たちが見つけたものや心が動いたことを伝えたい」という声から、フリーペーパーをつくることになった。

いつも通う朝市の花屋さんで、ピンクでふわふわの面白い花を見つけた沙耶さん。ケイトウの仲間、「猫の尻尾に似ている形なのでキャットテールという名前だよ」と教えてもらった感動を、トップ記事に選んだ。撮ってきた写真を貼り、見出しや小見出し、本文の内容を考えて、「変わったお花や優しいお店の人との話が楽しい朝市の花屋さんぜひ行ってみたい」と、自分の感想や考えを書く「子ども記者の目」を表し、印刷をして渡しに行った。

「上手に書いたねえ」と褒められ、お店に貼ってもらって満面の笑み。フリーペーパーにまとめることで、客観的な情報と、自分の思いや考えの双方を再認識し、見つけた人、もの、ことへのとらえを確かにしていった。



ICT 活用事例

・お出かけ取材でもっと上越を感じよう

朝市以外にも、自分たちで下調べをし、取材計画を立てて、バスや電車でのお出かけ取材に行っている。「春日山なら、自然も多いし、謙信公のことが調べられるよ。バスなら15分くらいで行けるよ」、「ゴーカートや遊具、SLが取材できるし、もし雨が降っても青少年文化センターに行けるのでいいと思う」「夏なんだから、やっぱり海でしょ！海も水族館のイルカショーも、港も取材できるよ」などと主張し、質疑応答をして、学級でコンペティション。

勝ち抜かないと自分の行きたい場所に行けないので、その場所のよさや取材できる対象、季節との関連などを必死で調べ、地図やパンフレット、時刻表を見せながらプレゼンテーションする。

7月のお出かけ取材は直江津。水族館でイルカショーに参加し、お昼ご飯を佐渡汽船ターミナルで食べながら、フェリーの入港や火力発電所を写真撮影、直江津海水浴場ではカニや貝殻取りをたっぷり楽しんだ。

他にも、上杉謙信の居城であった春日山、五智公園、シーサイドパーク、うみてらす名立、鶴の浜温泉街などへ出かけ、フリーペーパーにまとめる中で、自分たちの住む上越市の豊かな自然や観光名所、名産を味わうとともに、交通網や物流、産業、市街地と郊外の違いを自然に感じるようになっていった。

・地域のイベントに出よう「城下町高田花ロード」

9月、朝市に着くと「いつもの店、行ってきまーす」と、子どもたちそれぞれに馴染みの店が出来る様になっていた。そんな中、見慣れないポスター発見、「10月に高田花ロードってお祭りがあるんだって」とのこと。市からの要請もあり、全員一致で参加決定。

花とアートで町を彩るイベントで、市民の皆さんが高田の駅前通りや朝市をする通りに工夫を凝らした作品を展示するもの。「どんな作品をつくりたい？」と話し合いが始まる。「取材で見つけた特ダネをつくれればいいんじゃない？」「じゃあ、私はキャットテールがいいな」と沙耶さん。隆弘さんは「僕は、春日山城！」とイメージが広がる。何で作るか、どう飾るかを話し合い、上越市のジオラマに紙粘土のミニチュアを置いて、みんなで一つの作品にすることに決めた。

今までのフリーペーパーや取材カード、写真を見て、朝市取材で見つけたタケノコや花オクラ、お出かけ取材で行った五智公園のSLにシーサイドパーク名立のスライダーなど、一人一つの作品を紙粘土でつくっていく。健一さんは、「朝市で売っている旬のもの」と題して、モモヤクリ、丸ナスを作った。作品カードに「おいしい味わいをリアルに仕上げた」と記した通り、形や色をよく思い出し、丸ナスの実や栗の実の固い部分だけニスを重ね塗りして光沢を出した。モモはわざと切った状態にして、中身が見えるように工夫した。それぞれ自分のこだわりをもって手間暇をかけ、思いのこもったすてきな作品に仕上がった。



ICT 活用事例

個人作品が出来たら、ジオラマ部分をみんなで制作。「山の部分は緑にして盛り上がらせよう」「田んぼは何色にしようか」と相談を重ね、絵の具を粘土に混ぜ込んで形を整えていった。地図とにらめっこして指示を出していた孝雄さん、「上越市って、山と海に囲まれているんだね」とつぶやく。高田駅を手がけた和夫さんは自他ともに認める鉄道通。川チーム、高速道路チームと押し合いへしあいして信越本線を作り「関川と道路と線路ってほとんど同じなんだ」と気付く。



お出かけ取材の経験と、地図を基につくるジオラマから、地域の地理や交通網の特徴に気付いていった。

作品が完成したのは花ロード前日。自分たちが見付け、作った上越市の特ダネがてんこ盛りである。リヤカーに乗せ、壊れないようにみんなで押しながら「朝市、春日山、高田城、上越のいいところ～」アドリブでの作詞・作曲で歌まで飛び出した。子ども記者たちは3日間の花ロード開催中、気になって見に来ては、お客さんに作品を説明したり、壊れた所をボンドで直したり…。審査では、新潟日報上越支社長賞を受賞。代表の子ども記者が、市長さんもいる前で表彰式へ参加。「上越市のいいところへの思いが伝わってきて、上越市全部が家族の様に思えるすばらしい作品でした」と言葉をいただいた。

・朝市に出店「子ども記者朝市表現店」

10月には、もう一つ朝市感謝祭というイベントにも参加した。二・七の市の組合長さんは、いつも子どもたちが取材させてもらっている八百屋のおじさん。「みんなもお店を出してもいいよ。ただし、他のお店やお客さんに迷惑にならないようにね」やる気満々で売りたいものを話し合っっては画用紙にメモし、作戦会議開始。

今まで撮った写真を基にしたカレンダー、国語でつくってきた詩を印刷したポストカード、朝市の特ダネを紙粘土でつくったストラップ、朝市のエピソードを伝える写真絵本など、アイデアがどんどん出る。宣伝のためののぼりやポスター、宣伝用のフリーペーパーなども作成して準備万端。

そして迎えた感謝祭当日。リヤカーに商品を載せて、いざ朝市へ。道行くお客さんにフリーペーパーを配り、声をかける。「10月、11月のオリジナルカレンダー、いかがですか～」とかわいい声が朝市に響き、用意したカレンダー20枚はほぼ完売。写真絵本は150円の最高額商品にもかかわらず、早々に売り切れた。朝市ストラップも大人気で続々売れていく。交代して店番をし、休憩時にはコロッケや大判焼きに舌鼓。詩のポストカードも用紙した100枚がほぼ完売だった。自分が書いた詩が選ばれ、ほめられて買ってくれるお客さんの姿に、喜びは格別である。「上手だねえ」とお金を出して買ってくれ、「これどうやって作ったんだい？」とお客さんとかかわった。1枚10円といった値段の商品でも、品物はみんなの手作り。

売り上げと商品券を合わせて13595円。「すご～い」「何に使う？」「パーティーしよう」という声もある中、「お金の多さじゃないね」「僕の詩、売れたの嬉しかった～」「お客さんがいっぱいだよかったね」と、朝市にお店を出している方たちの喜びを、子どもたちも味わうことができた一日であった。



ICT 活用事例

・たくさんの人に伝えるためのブラッシュアップ

フリーペーパーを書き、渡していくうちに、「駅や観光案内所でも渡して、たくさんの人に上越市のよさを知ってもらいたい」という声が挙がるようになった。

プロの技を知ろうと、タウン誌「にいがた komachi」の編集部長の井上さんを招いて、読む人の心をつかむにはどうしたらいいかを考えた。隆弘さんが書いたフリーペーパーのトップ記事は春日山の大砲。赤錆びた大砲に興味をもって撮影したものの、聞く人もおらず、近くにあった石碑も難しい崩し字で、由来がよく分からない。撮った石碑の写真を大学の先生に見せたり、ウェブページや本で春日山にある大砲を調べたり

する中で、日露戦争でロシア軍から鹵獲した砲であると分かった。隆弘さんは、レプリカだと思っていたのに、本当に戦争で使われていたもの、しかも、日本のものじゃないことに驚く。そのことを、読み手に分かってほしいと考えて、大見出しを「レプリカかな？本物かな？」とした。読む人の気持ちを考え、内容を端的に表わすのではなく、何のことが書いてあるのか読みたくなるキャッチコピーにしたのである。「写真をトリミングして、大砲の迫力を増やすといいよ」「行き方の地図も描くといいんじゃない？」「本当かどうか確かめないと見た人に悪いね」と、よいところやアドバイスを交流し、様々な立場の人が読んだ時、どうすれば心を動かし、正しい情報を伝えられるかを考える。

そして、井上さんの「記事を書いてみる？」という言葉から、雑誌の記事も書かせてもらった。学級全体で何を書くか考えた春・夏の記事は、誰でもお店の人と気軽に話せる朝市。キャットテールを題材に、写真や言葉、キャッチコピーを選んだ。自分たちの記事が本屋さんで売っている雑誌に載っているのを見て、子ども記者は大喜び。地域や社会とかかわり、上越市のよさをたくさんの人に伝えられる充実感を得ていた。

■実践における子どもの学び

○取材やイベントによって、地域のよさ、人のあたたかさを実感する

週1回程度訪ね、本当によくしていただいた朝市の方。フリーペーパーをお店に飾り、おまけをしてくれる方も多い。子どもたちは試食をさせてくれたり、優しくいろいろなことを教えてくれたりする行きつけのお店の方が大好きになった。また、月に一回の子どもたちが計画し、バスや電車で行く「お出かけ取材」で、郷土に対する愛着を膨らませた。子どもは四季や自然の恵みが豊かな地域のよさ、そこで育まれた人々のあたたかさに気付いていった。フリーペーパーや地域誌とタイアップして子どもの写真や記事を発信することから、地域が活性化したり、朝市の人が喜んだりする充実感を味わった。

○ファインダーを通すことで、みる行為が深化する

一眼レフカメラを持った取材で、ものをみる目が、細やかになったり、変化を感じたりするようになった。ファインダーからものや風景をのぞき、時間と空間を切り取ることで、対象の認知が深まっていく。また、写真を軸に、見出しや本文を加え、ブラッシュアップしてフリーペーパーにしたり、写真と詩をコラボレートさせたりしてきた。思いや考えを再構成して視覚化し、発信することで、同じ対象に対しての論理的思考と感性をかかわらせてはたらかせることにつながった。



ICT 活用事例

○経験とフィードバックの繰り返しから情報活用の実践力と情報化社会に参画する態度が育まれる

撮りためた写真や感想カード、インタビューから、月1のフリーペーパー作成や、地域紙「にいがた komachi」への季節ごとの記事掲載を重ね、言語活用力や情報活用の実践力を高めた。見出しと写真、本文を組み合わせ、正しく情報を伝えるとともに、どう読者が読みたい記事にするかという試行を、経験とフィードバックで重ねてきたからである。また、通っている朝市の人というプライベートとパブリックの狭間の方への発信から、雑誌への記事掲載というパブリックな発信へと経験をつなげた。



お店の人の顔やお客さんを思い浮かべ、情報の信頼性、著作権や肖像権など、情報発信に対する責任や社会への影響を体験的に感じ、様々な立場に立って情報への考えをつくった。

■おわりに

子ども記者は、写真やフリーペーパー、詩などで感じた地域のよさや人のあたたかさ、季節の移ろいを多様に表現・発信した。情報を発信し、フィードバックを重ねる中で、情報量や即時性などメディア特性の違いを実感するとともに、世の中にあふれる情報は、編集やまとめ方で、多分に発信者の意図が含まれることを感じ、主体的に情報を読み解き、クリティカルにとらえるようになった。



体験を通して感じ、考えたことを情報発信することにより、地域や季節とのかかわりに意味付けされるとともに、必要な情報を主体的に収集、判断、表現、処理、創造する活動を繰り返し、受け手の状況や思いを踏まえた情報活用の実践力、実践的な情報化社会に参画する態度が育まれた。

体験を基にした子ども発の学びは、子どもに深く根を下ろす反面、場当たりの必要な内容を網羅できない危惧がある。3年生における情報活用力を教師がしっかりと思い描き、子どもと活動を営む中で、子どもの体験場面から感度高く考える場を設定していくことを意識し、実践を進める必要がある。

小学校段階での情報活用力の育成に当たっては、顔と顔が見える実際のかかわりの中で、そのよさをたっぷりと感じる大切であると考えている。

3年生という9歳半の節目直前の子どもがもつ行動力と自発性を十分に発揮させ、実感あるコミュニケーションを体得することで、これから生きていく高度に情報化された社会の中でも、顔の見えない相手へ思い馳せることができると考えている。



